

民家型介護事業所 実録奮戦レポート

車イスのトメさん（97）が 歩けるようになった！

～心からの笑顔を見たくてがんばる、私たちの取り組みと挑戦～



ご挨拶

「車イスのトメさん（97）が元気になった！」
をお読みくださることを、心より感謝申し上げます。

このレポートは、社内のミーティングの中で
「お世話になっている地域の皆様に何か恩返しが出来ないだろうか？」
との話題が出て、作成に至ったものです。

「介護にお疲れ・お悩みの方々に、ストレス軽減につながる情報（ヒント）
を何か提供できないだろうか？」

「私たち あずゆあはうす で日々起こっている機能回復の実例や、ケアを行う
上で日々意識・実践していることをお伝えしてみるのはどうだろうか？何かの
ヒントにしていただけるかもしれない」

そんな思いから、実際に私たちの事業所で起こった回復事例を一つ取り上げ、
まとめさせていただきました。

何分、文章をまとめるプロではないので、拙く読みにくい部分もあるかと思
います。

その点をご容赦いただき、その上で、少しでも介護に悩む皆様のお役に立つ
ことが出来れば幸いです。

デイサービスあずゆあはうす 府中1番館・2番館
管理者 那須 裕子
生活相談員 松本 美保
スタッフ一同

車イスのトメさん（97） が歩けるようになった！

～心からの笑顔を見たくてがんばる、私たちの取り組みと挑戦～

目次

1. トメさんとの出会い（P3）
2. 「エッ、これ何？」（P4～P5）
3. 布団もオムツも、、、（P5～P6）
4. 発見！トメさんの元気の素（P6～P7）
5. 今度はオムツ外しに挑戦！（P7～P8）
6. そしていよいよ、車イスを、、、
（P8～P10）
7. なんと、介護度まで！（P10～P11）
8. おわりに（P11～P13）

1. トメさんとの出会い

トメさん（97歳）と私たちが始めて出会ったのは2008年8月1日。
夏真っ盛りの本当に暑い日でした。

トメさんは、7月末までは、23区内の施設で過ごされていました。

が、私たち あずゆあはうす の存在を知った娘さんより、

「私（娘様）の自宅も近いし、何より慣れ親しんだ地元で残り少ない時間を少しでも長く過ごさせてあげたい。最終的には特別養護老人ホームにお世話になるのかもしれないが、それまでの間、あずゆあはうす さんでお願いできないだろうか？」との話があり、私たちの事業所での利用が始まりました。

（利用形態は、「日中デイサービス＋介護保険外宿泊サービス」）



「トメさん、こんにちは」

「始めまして。今日からよろしくお願いしますね」

トメさんとの出会いは、ご挨拶から始まりました。

事業所に到着したトメさんに、スタッフは次々と声をかけます。

しかし、肝心のトメさんはというと、私たちの問いかけに対してもほとんど表情を変えず、発語もなし。車イスに座り、活気もほとんど感じられない状態でした。そんな様子を見た私たちは、不安を感じつつも、

「慣れない場所にいきなり来たわけだし、無理もないよね」

「徐々に慣れてもらって、1日でも早くトメさんらしく過ごせるようになってもらおうよ」

「若い頃どんな人で何が好きだったか、ご家族にもっと聞いてみよう」
などと言葉を交わし、互いに頑張ろう、と励ましあったことを覚えています。
トメさんと出会った初日は、こうして静かに暮れていきました。

2. 「エッ、これ何？」

初めてのデイサービスが終わり、夕食も食べ終わり、いよいよ初めてのお泊まりの始まりです。

まずは着替えていただくため、夜勤スタッフは、寝巻きを出そうとトメさんの荷物を解き始めました。すると、そこには、「寝巻き」と書かれてはいるものの、見慣れない形をしたものが。。

「これが寝巻き？なんか、違うように見えるけれど、、、」
広げてみてビックリ。

何とそこには「寝巻き」と書かれた拘束着が入っていました。

「何で拘束着が入っているの？まさかこれが寝巻き????」
不思議に思ったスタッフは、夜遅い時間ではありましたが、確認のため、以前にトメさんが入所していた施設に電話で確認をとりました。すると、
「トメさんは夜、勝手にオムツを外してしまうなどの問題行動があったので、家族に了解を取り、夜間時には（拘束着を）着て寝てもらっていました。」との返事。

その話を聞いて驚いたスタッフは、娘様にも電話を入れました。すると、
「私だって本当は着せたくなかったんですよ。でも、そうしないと施設の方に迷惑をかけてしまうし、そうでないと入所が難しい、とのことだったので、止むを得なく（着用を）OKしたんです」との回答が。

それを聞いたスタッフは悩みました。

私たち あずゆあはうす は、

「最期まで、その人らしく過ごすことをサポートさせていただく」
ことを何より大事に考える事業所です。

「拘束着を着用させるのは、本来のトメさんらしい姿ではない」
そう判断したスタッフは、娘様に再度連絡を取り、次のように話をしました。

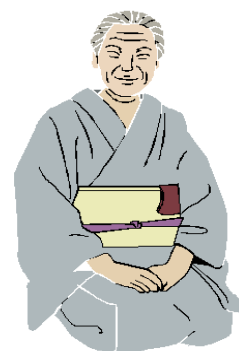
「朝、どんなに布団が汚れていても私たちは一向に構いません。布団なんてたとえ汚れたとしても、洗えばきれいになります。とにかく、この拘束着だけは、絶対にトメさんに着ていただきたくないんです。せっかく縁あって私たち あずゆあはうす をご利用いただいているわけですから、可能な限りトメさんらしい生活を取り戻せるよう、私たちなりにチャレンジさせてください」
「そんな、、、大丈夫なんですか？」と申し訳なさそうに話す娘様の声に、
「もちろんです！」

と答えたスタッフ。

その夜、トメさんには、寝巻きがわりになるものを着用いただき、一般の方と同じ状態でお休みいただくことになりました。

（「布団、どれくらい汚れるかなあ」と少しだけ心配しながら、、、）

3. 布団もオムツも、、、



そして8月2日、朝7時。利用2日目の朝。

夜勤スタッフは覚悟を決め、明るい声で、

「トメさん、おはよう！よく眠れましたか？」と声をかけました。

「汚れても洗えば落ちる、なんて威勢よく言い切ったけど、一体どれくらい汚れているんだろう？深夜に確認した時は大丈夫だったけど、、、」

そんなことを考えながら、スタッフは恐る恐るトメさんの布団をめくりました。すると、、、

何と、予想とは裏腹に、布団は勿論、おむつも何も汚れていない状態だったのです。

「夜中に定時トイレ誘導を1回しただけなのに、、、」

ビックリ、というか、正直、拍子抜けしたスタッフは、驚きと喜びの両方の気持を持って、その出来事を次の日のスタッフに克明に報告しました。

それを聞いた次の日のスタッフも「それはすごい！」と驚き、初日と同様、トメさんには普通の寝巻を着て寝ていただくことに。

すると、3日目の朝。オムツは多少汚れていましたが、布団は全く汚れていない状態。次の日も、またその次の日も、ほぼ同じ状態が続きました。こうして、いつの間にか「拘束着」は不要の荷物となっていました。

4. 発見！トメさんの元気の素

拘束着を着用しなくなってから2週間。トメさんには、明らかな変化が起きていました。

私たちからの「おはよう！」「こんにちは！」などの声かけにも笑顔で応えていただけるようになったばかりか、本人から私たちへの声かけも徐々に増えてきていたのです。

更に、トメさんにもっともっと元気になっていただきたいと考えていた私たちは、ある一つのアイデアを実行し始めていました。

それは、「トメさんに赤ちゃんの面倒を見てもらおう」というものでした。なぜ、赤ちゃんの面倒を見てもらえば、トメさんはもっと元気になるはず、と考えたのかー

そのヒントは、ご家族から詳しくうかがったトメさんの生き様にありました。トメさんは昔から本当に子供好きで、孫やひ孫のオムツ交換やミルクやりなど、90歳を越えてもずっとお手伝いをされていたそうです。

私たち あずゆあはうす は、「子連れ出勤OK」「孫、ひ孫、近所の子供たちなど、子供の訪問大歓迎」を標榜する事業所です。そのため、以前より、小さな子供が頻繁に事業所へ出入りしていました。そして、その中の一人に、トメさんがよくお手伝いをされていた頃の孫やひ孫とほぼ同じ年齢の子供がいることに気付いたスタッフが、

「その子が事業所に来ている時には、トメさんに面倒を見てもらうようにすればどうだろう？昔を思い出し、元気を取り戻せるかもしれない」と考えたのです。

このアイデアは見事、大当たりしました。

トメさんは子供を見ると本当に嬉しそうな顔をされ、満面の笑みを浮かべました。動き回っている時も常に目を離さず、行方を追ひ、声かけを繰り返していました。

子供のほうも肌で感じるのでしょうか、あっという間にトメさんに慣れ、誰も何も言わないのに、気がつけばいつもトメさんのそばにいるようになりました。こうして生活に張りが出てきたトメさんは、さらに元気を取り戻していったのです。



5. 今度はオムツはずしに挑戦！

子供との触れ合いにより、ますます元気を取り戻し始めたトメさん。

そんなトメさんを見ながら、私たちスタッフはあることを考えていました。

「拘束着を着用させられたりなど、トメさんは、自分の本意ではない行為を強いられたことにより、活力を失ってしまっていたのではないだろうか。

ひょっとしたら、トメさんはまだまだ元気になる可能性を持っているかもしれない」

そこで、私たちは、更にトメさんに元気になっていただくための次の目標として、「日中と夜間のオムツをはずす」ことを目指すことにしました。

と言うのも、排泄コントロールの効果も表れてきたのか、最近は日中も含め、オムツが汚れない日が増えてきていたのです。

すっかりコミュニケーションが取れるようになっていた私たちは、トメさんにこんな相談を持ちかけました。

「私たちが声をかける時以外でも、トイレへ行きたいと思ったら、近くのスタッフに声をかけてくれる？そうしてくれると、とても嬉しいんだけど」

「分かった」と言ったトメさんは、その後、尿意や便意を感じた時には、私たちに声かけをしてくれるようになりました。もちろん、始めは声かけをしてくれた段階で、既にオムツが汚れてしまっていることもありました。

でも、そんな時でも私たちは、

「トメさん、約束通り声をかけてくれて本当にありがとう。」と感謝の気持ちを伝えました。また、

「次、トイレに行きたいと思ったときにも今回みたいに声をかけてね。今度は、もう少しだけ早めに声をかけてくれると嬉しいな」

と笑顔で付け加えることを継続していきました。

そんなやり取りを毎日続けて2～3週間ほどが経過した頃でしょうか、ほぼ100%、オムツで用を足す前にスタッフへ声かけをしていただけるようになってきました。それは本当に嬉しいことでした。

そこでいよいよ、私たちはトメさんに次のような声かけを行いました。

「今のトメさんならオムツなしでも大丈夫だよ。今日から外してみよう。」

トメさんはちょっと間をおいて、「ウン」と頷きました。

利用開始から約1ヶ月半、こうして無事にオムツが外れ、通常の下着で過ごし始めたトメさんは、ますます元気を取り戻していったのです。

6. そしていよいよ、車イスを、、

拘束着だけでなく、オムツを外すことにも成功したトメさん。

そのころは他の利用者と冗談を言い合ったり、たまに口げんかをしたりなど、更に元気を取り戻されつつあるように見えました。

ところがそんなある日。

私たちはまたもやトメさんに驚かされることになります。



今度は、トメさんが、車イスを持つ腕に力を入れて、自分で立とうとされていたのです。

「危ない！」とっさに感じ、私たちは手を差し出そうとしましたが、思い直して直ぐに手を引っ込めました。

「本当に危なくなった時に手を差し出せばよい」
そう考えて、しばらく様子を見守ることにしたのです。
すると、トメさんはゆっくり、ゆっくりと立ち上がり、2～3秒ほど立位を取り、どっかと車イスに座り込みました。
本当に驚きの、でも、感動の一瞬でした。

「トメさんは車イスからも離れられるかもしれない」
そう思った私たちは、次は、「外出時以外は車イスを使用しない状態」を目標とすることに決めました。
どのように進めていくか、過去の様々な経験を踏まえ、スタッフ間で話し合いを行いました。その結果、

「まずは車イスから下りた状態に慣れていただくため、日中は、なるべくリビングのソファに座っていただくようにしよう。」
ということになりました。そうすることで、少しずつ、歩行が可能だった頃の感覚を取り戻すことが出来たら、と考えたのです。
次の日から早速、トメさんには車イスから離れ、ソファに座ってもらうように声かけを行いました。

はじめは不安そうな顔をされていました。が、ソファに慣れられるといつもの穏やかな顔に戻り、そのタイミングを見計らったスタッフは、まずは、立ち上がったたり座ったり、という動きを一緒に繰り返し行うことから始めました。同時に、トイレへの移動などを想定し、四つん這いになって歩くことなども練習しました。

（もちろん、ソファはトイレに一番近い位置に座っていただいていたいました）

正直なところ、私たち自身、直ぐにでも手を差し伸べたくなる気持ちをおさえるのはとても大変なことでした。

「でもそれでは、トメさんらしく生活することを阻んでしまう」

「ギリギリまで見守る姿勢を貫こう。危なくなったら手を出せばいい」

そんな思いでスタッフ全員、我慢することを徹底しました。

そのような活動が続ける中、私たちは、トメさんの変化に手応えを感じていました。立位をとった際のふらつきが少なくなり、徐々に足腰がしっかりしつつあったのです。

その後、少しずつ、手引きや手すりを使って歩く練習を開始していきました。まずは立位の状態を出来るだけ長く保持できるように、その後、1歩、また1歩と少しでも歩く歩数を増やしていきました。

また、「訓練」「練習」が中心になると辛い時間ばかりが続いてしまうので、他にも洗濯物を畳んでもらったり、布団を敷いてもらったりなど、日常的なことを手伝っていただくことで、肉体的にも精神的にも元気になっていただくことを目指していきました。

そんな毎日を継続することで、少しずつ身体面での成果が見えてきました。利用開始から約3ヶ月が経過した頃には、四つん這いではもちろん、事業所内を手引き、もしくは手すりを持って自由に動かれるトメさんの姿が見られるようになったのです。

こうして、3ヶ月前には歩くどころか、車イスに座りっぱなしで、発語もほとんどなかったトメさんが、あっという間に元気になっていったのです。

7. なんと、介護度まで！



更に、うれしいことが起こります。

利用開始から4ヵ月後、トメさんに認定再調査が入りました。

すると、、、

なんと、介護度が「要介護4」から「要介護3」へと向上!!

認定調査の方々やお医者さんからも

「信じられない！」

「どうしてこんなに短期間に元気になれたの？」

などと、驚きの声をたくさんいただきました。

その声を聞いた私たちは、トメさんやトメさんの家族と同じくらい、いや、ひょっとするとそれ以上に嬉しく、幸せな気持ちになりました。

こうして、車イス生活だった97歳のトメさんは、自分らしさを取り戻し、元気になっていかれたのです。

8. おわりに

「車イスのトメさんが歩けるようになった」

この経験は、私たちにとっても大きな自信となる出来事でした。

「何故こんなことが実現出来たのだろうか？」

振り返ってみると、様々な要因があったように感じます。

- ・トメさんとの信頼関係を構築するため、声かけ、話かけなどのコミュニケーションを徹底した
- ・トメさんの気持ちに「共感」出来るよう、スタッフ全員が常に意識した
- ・元気な頃のトメさんの話を詳しく聞き、トメさんの「元気の素」を再現しようと努力した
- ・たとえ小さなことでも、うまく出来たことに対して一緒に喜び、感動し、感謝した
- ・うまく行かない時でも決して否定しなかった
- ・日常行動をしっかり見つめ、仮説⇒検証を繰り返した
- ・排泄コントロールなどの介護技術を効果的に活用した

などなど、数え上げればまだまだキリがないほど出てきます。

確かに、トメさんに元気になっていただくためには、全ての要因が必要であったことは間違いありません。

でも、私たちは、それ以上に大切なものがあることに気付きました。

「これがあったからこそ、トメさんに元気になってもらえた」

「これがあったからこそ、私たちは上記のような動きが出来た」

と、はっきりと思えるもの。それは、

- ・ どんなに高齢になっても、その方らしく、自然な状態で、最期まで人生を過ごしていただきたい
- ・ 本人に出来る可能性が残っている限り、その可能性に対して簡単にあきらめない

という2つの「こだわり」の深さです。

先に記した要因は、この「こだわり」から自然に出てくる行為なのだとあらためて実感しています。

どれだけ年を重ねたからと言って、或いは、たとえ認知症になったとしても、その方の性格や個性が完全に失われてしまう訳ではありません。

一人ひとり、独自の個性が存在する中で、「その人らしさ」にこだわり、その「らしさ」をサポートさせていただくことで、最期まで幸せな時間を過ごしていただくこと。

それが私たち あずゆあはうす のプライドであり、存在意義だと思っています。

これからもこの「こだわり」を大事にし、周囲への感謝の気持ちを忘れず、
利用者の皆さんと共に楽しく頑張ってまいります。
最後までお読みくださり、ありがとうございました。

デイサービスあずゆあはうす 府中1番館・2番館

1番館管理者 兼 統轄管理者 那須 裕子

2番館管理者 石沢 宗宏

生活相談員 松本 美保

スタッフ一同



御礼

拙いレポートに最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

「介護にお悩み・お疲れの皆様のストレス軽減に少しでも貢献できれば」
そんな想いでこの実録レポートを作成致しました。
少しは皆様のお役に立つことが出来たでしょうか？

沢山のご家族と出会う中、「介護」は今、身近で本当に大きな問題となっていることを私達も痛感してきました。
身内であるが故、愛情が深いが故に、悲しさや辛さの裏返しでつい感情的になってしまったり、手を上げてしまったり、という事態にも数多く立ち会ってきました。

そんなご家族と出会う度に、私たちはいつも思います。

「どうか独りで抱え込んで悩まないで下さい」と。

介護の問題は、家族だけでは解決できないことも沢山あります。
そんなとき、これからは決して独りで悩まず、気軽に「介護のプロ」である私たちのところへお電話をいただきたいと、切に願っております。

「こんな場合どうすればいいの?」「話を聞いてください」でも、何でも結構です。決して独りで抱え込み、ストレスを溜めないようにしていただきたい。これが、様々な家族を見てきた私たちの素直な想いです。

介護で悩む地域の皆様に、私たち介護のプロの知識や経験が少しでもお役に立つのであれば、とても嬉しいことです。

本当に小さな存在の私たちですが、少しでも皆様のお役に立つことが出来れば心から嬉しく思います。

(連絡先) 〒183-0005

東京都府中市若松町2-18-18

TEL: 042-360-6933

FAX: 042-360-6934

担当: 那須・松本